

校長室だより		令和4年5月7日発行
共学共高	第	
	22	発行責任者
	号	白梅学園高等学校長 武内 彰

新年度に想う～日々の大切さ～

令和4年度（2022年度）が始まり、早1か月余りが過ぎた。風薫る5月は空気が心地よい。新たに59期生を迎え、これまでのところ何とか対面での教育活動を継続することができていることを嬉しく思う。

これまですべての宿泊行事が中止となった57期生は、先月に学年行事として高校入学後初めての1泊旅行へ出かけ、無事に終えることができた。高校時代の良き思い出の一つとして、生徒たちの胸に刻まれたことであろう。

3年生は3年生の顔になり、2年生も2年生の顔になり、そして初々しい1年生を迎えて、学校は日々躍動している。2年前とは大違いである。もちろん、covid-19の影響がなくなったわけではないが、感染防止に努めながら授業や部活動、生徒会活動、委員会活動等ができている現状を、教育に携わる者として喜ばしく感じている。

昨年の学校説明会の際、「対話のある授業に参加するのが楽しみ」と話してくれたEさんは、今どのような想いで授業に参加しているのだろうか。同様に、「バドミントン部に入部したい」と相談に来てくれたKさんは、実際にバドミントン部に入部してくれた。初心者の彼女は、日々校長である私と練習することをどのように受け止めているのだろうか。夏の体験入学で私の授業に参加したKさんも実際に入学してくれた。毎日、どのような想いで白梅での学校生活を過ごしているのだろうか。

人と人との出会いは、不思議なものである。こうしてご縁があって、同じ学び舎で過ごす友達や大人たちとの触れ合いが、お互いの成長や幸福に向かうものであることを願わずにはいられない。

私は毎日、授業を観て回っている。1年生のいるH棟の階段を上がっていくと、生徒たちの声が聞こえることが多くなった。1年前にはあまり感じなかったことだ。さまざまな先生たちが、発問を工夫して、生徒たちに対話を促し、それらを拾い上げてクラスの中で共有する取組を進めてくれている。

地歴公民のI先生は、生徒たちに棒グラフを提示し、どの国のものであるかを小グループで話し合わせた後に、発表させていた。巡回していた私には何の棒グラフだったのかはわからなかったが、「島がある」「海に面している」「広い陸地がある」といった情報を切り口に

して、生徒たちは理由と共に国名を挙げていた。

英語の T 先生は、教科書の内容に関わる写真スライドを複数枚提示して、グループごとに担当を決めた上で、何を表しているか英語で記述させ、発表させる取組を行っていた。生徒たちは意見交換しながら、嬉々として英語の文章を創り上げていた。

理科の G 先生は、校長室前のウッドデッキスペース（ツリースペースというようだ）からバレーボールをそのまま落とす場合と、地面に水平に投げ出して落とす場合との運動を生徒たちに実演させ、落下時間の測定や落下する軌道の撮影をしていた。

英語の I 先生は、強調構文の授業において、強調する語句を 3 つ指示して、それぞれを強調する文を作らせていた。I 先生が、「隣の友達と相談しながら確認するように」と投げかけると、後ろの扉付近で観ていた私の目の前の生徒たちは、あっという間に 3 つの文を書き上げていたが、「・・・ここは is かな？ was かな？」と時制について話題にしていた。二人ともそばにいた私の方を見るので、「うんうん」とリアクションしながら、彼女たちの選ぼうとしていた方を示唆した。懐かしい、そういえば「時制の一致」と、遠い昔に教わった記憶がある。

家庭科室脇の校長室へつながる階段を上っていると、生徒たちが実習をしている。私に気づいた何人かが、会釈をしてくれるので、こちらも返す。自分で作りかけている作品を窓越しにジェスチャーを交えながら見せてくれる。私も拍手でお返しをする。

こんな日常がいつまでも続いてほしいと、心から願う。

現在の 1 年生から新学習指導要領に基づいた教育課程が始まっている。授業においては単に知識の伝達・吸収だけではなく、そうした知識を活用することや、主体的に学ぶ態度を育てること、対話による学びや探究による学びを通して思考力・判断力・表現力を培うことなどが求められている。大学入試の在り様も変わっていく。学校は時代の先を見据えて、そして生徒たちの将来を見据えて、日々の教育活動を一步ずつ積み重ねていくのだ。



(共学共高とは：本校のディプロマポリシー（育てたい生徒像）の一つで、「共に学び、共に高め合う」生徒の姿を表す)